

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第8条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

フリガナ 氏名(姓、名)	ヤナガラ コウヘイ 柳川 耕平		授与番号 甲 1435 号
学位の種類	博士(文学)	授与年月日	2020年 9月 25日
学位授与の要件	本学学位規程第18条第1項該当者 [学位規則第4条第1項]		
博士論文の題名	予持概念を手掛かりとしたフッサール時間論の包括的解明		
審査委員	(主査) 谷 徹 (立命館大学文学部特任教授)	三村 尚彦 (関西大学文学部教授)	
	亀井 大輔 (立命館大学文学部教授)		
論文内容の要旨	〔論文の構成〕 本論文は、フッサール現象学の重要な柱である「時間論」について、「予持」(Protention)という概念(のフッサールの初期、中期、後期における変化)を手掛かりにして、その包括的な解明を目指したものである。 全体の目次(大枠のみ)は以下のようにになっている。		
	0. 序論		
	第一部 中期時間論における予持		
	1. 1 予備考察		
	1. 2 『ベルナウ草稿』における予持		
	1. 3 『ベルナウ草稿』における体験流の時間的秩序		
	第二部 初期時間論における予持概念		
	2. 0 はじめに		
	2. 1 初期時間論における予持概念の特徴づけ		
	2. 2 初期時間論の性格、中期時間論の性格		
	2. 3 第二部のまとめ 初期時間論の主要問題と中期時間論の主要問題		
	2. 4 【補論】初期と中期における時間位置の個体化		
	第三部 後期時間論における予持		
3. 0 はじめに			
3. 1 後期『C草稿』における予持概念			
3. 2 中期時間論と後期時間論における自我概念の比較			
結論			

〔論文内容の要旨〕

序論では、「時間」という現象が特有の（「私」＝「自我」への）近さとそれ自体の多面性をもつことが論じられる。そのうえで、従来の研究に欠落していた点が批判され、本論文がそれを克服すること、そして予持という概念を手掛かりとすることの方法論的メリットが示される。

第一部では、これまで十分に研究されていない、中期フッサールの『ベルナウ草稿』の詳細な読解が試みられる。そこで、フッサールが、時間の構成に関して、予持にいくつかの重要な役割を見ていたことが示される。とりわけ、対象の構成に先立つ次元——「体験」と呼ばれることが多い——において予持が分析される。ここでは、未来の対象・与件を志向する予持だけでなく、予持の働きそれ自体を予持する予持が見出される。さらに、予持が原印象および把持と「絡み合う」ということによって、時間の連続性が可能になるとフッサールが捉えていたことが、解明される。

第二部では、中期から遡って初期フッサールの時間論における予持概念が示される。ここでは、『内的時間意識の現象学』が詳細に読解されて、予持概念は登場するが、しかし、フッサールが体験流の「統一」という点を重視していたため、中期のように予持が十分に主題化されることがなかったという解釈が示される。

第三部では、後期フッサールの時間論が検討される。後期には、またもや予持があまり主題化されなくなる。しかし、だからといって、後期フッサールがそれまでの予持の解明を放棄したということではなく、むしろ、主題が変化したため、時間の別の側面が扱われるようになった、という解釈が示される。その主題は、体験流を構成する唯一の自我である。一方で、フッサールは、体験流のそれぞれの位相に自我が居合わせることを論じつつ、しかし、それらを唯一の自我が統一すると見る。中期では、自我が扱われるときには、その「立ちとどまる」という側面が重視されていたが、後期では、自我は「流れつつ立ちとどまる」というように記述され、ここでは、それぞれの位相の自我の流れる側面と、それらを統一する自我の立ちとどまる側面が、強調される。このような主題の変化のなかでは、予持概念の展開する余地が減少する、という方向での解釈が提示される。

結論では、これまでの解明がとりまとめられる。ひとつは、客観の構成、体験流の自己統一化、時間形式（時間的秩序）の構成、それらを構成する超越論的自我という、フッサールの時間論を支える諸側面が改めて確認される。ふたつには、時間を構成する、立ちとどまる超越論的自我（現在）が、つねに、広い意味での他なるもの（もろもろの時間位置における自我）との関係をもって成立することが確認される。以上のことが、予持概念の変遷を手掛かりとして解明された。

〔論文の特徴〕

本論文は、『ベルナウ草稿』での大きく展開される予持の概念を手掛かりにして、フッサールの時間論を包括的に捉え直そうとする試みである。

本論文のひとつの特徴として、従来、「把持」(Retention)のいわば逆立ちとだけみなされていたフッサールの予持概念について、本論文はその豊かな内容を示した。他方で、予持を詳細に論じた『ベルナウ草稿』もそれ自体これまで十分に研究されてこなかったが、これの詳細な読解が本論文では重視されており、予持を中心にするとはいえ、その内容が大きく理解されるようになった。

他方で、ある意味で論文の形式に関わることであるが、本論文は、第一部に中期フッサールの(予持を中心にした)時間論を置き、そこから、第二部で初期フッサールに遡り、第三部で後期フッサールに展開するという論文構成をとる。これは、最初に予持という概念を際立たせてその重要性を明示し、それを軸にして、フッサール現象学における時間論の展開を示すためのものである。そうした独自の論文構成によって、本論文は新たな視角からフッサールの時間論の重要な側面を浮彫にするとともに、時間という「事象そのもの」にも迫っている。

これらの点が、本論文の独自のそして大きな特徴をなしている。

〔本論文の評価〕

本論文に対する評価としては、以下の点があげられる。すなわち、これまで十分に研究されてこなかった『ベルナウ草稿』が、本研究によって大きく解明された点が、審査委員全員によって、高く評価された。本研究は、今後のフッサール時間論を包括的に捉えるための新たな方向を示すという大きな貢献をなしている。

他方、いくつかの不備が指摘された。やや細くなるが、示しておく。まず、フッサール現象学それ自体を突き動かした基本問題と時間論との関係が示されていない。フッサールが『論理学研究』で示した「体験」の概念が本研究ではあまり活かされておらず、時間論にそれが関係していることが示されていない。時間を構成する超越論的自我は唯一的であるが、同時に、他者をも構成する。そうすると、時間と他者との関係が問われるが、その点が示されていない。本論文では、「自己意識」という用語が使われており、これはおそらく先反省的なものであると思われるが、しかし、それが「反省」とどう関係するのか、明示的に示されていない。引用テキストの文脈がいささかずれている箇所がある。予持がかかわる未来の無限性が、カント的意味での理念と呼ばれるものとどのように関係しているのか、説明がほしい。それは、神的な「全知」性を必要とするのかの説明がほしい、といった指摘がなされた。

しかし、これらの問題点は、本論文のなかでもある程度まで示されており、よりいっそうの明示が望ましいというような意味での問題点である。その意味で、本論文の価値を大きく引き下げるものではない、と判断される。

以上、公開審査とそれを踏まえた審査委員会判定会議の議論により、審査委員会は本論文が本研究科の博士学位論文審査基準を満たしており、博士学位を授与するに相応しい水準に達しているという判断で一致した。

試験または学力確認の結果の要旨

本論文の公開審査は2020年7月2日13時30分から16時過ぎまで、オンライン形式で行われた。こうした状況にもかかわらず、二名の傍聴者を得た。

審査委員会は、フッサール現象学、その時間論を主軸として、上記に示されたいくつかの問題点を申請者に投げかけた。申請者は(いくつかの問題点に対しては即答を留保したが)多くの問題点に対して、適切な応答を示した。また、申請者の本学大学院文学研究科人文学専攻哲学専修博士課程後期課程において発表したさまざまな研究活動についても、審査委員会は十分な注意を払った。それらをつうじて、申請者が博士学位にふさわしい能力を有することを確認した。

したがって、本学学位規程第18条第1項にもとづいて、博士(文学 立命館大学)の学位を授与するのが適当であると判断する。